

「物語」としての道徳

—デュルケム、ベルグソンからベイトソンへ、集合表象の問題—

加藤 剛（関西学院大学院）

本発表において、デュルケムのいう集合表象がベルグソンによって継承され、道徳が「想話機能」による社会の自己保存の為の「物語」にすぎないとされる。この点を考察する。

＜道徳科学と集合表象＞

教師を含む聴衆を前にしたソルボンヌ講演で、デュルケムは世俗化された公教育における「組織的社会化」としての道徳の方法を語る（「道徳教育論」）。ここでは規律や集団愛が重視されるのであるが、有機的連帯の時代にあっては自律的な統合が期待されるだけに、道徳の論理的整合性への主知的な受諾、といったことが教育の根本となるのだ。子どもを道徳行為へと導くにあたって、何よりも行為の意義の説明がなされなければならない。今や、道徳も科学として合理的な方法を持ちうるのだ。例えば体罰禁止や教育環境等、現在でも充分、理にかなう事柄をデュルケムは扱う。だが反面、「分業論」の「激情的反動としての刑罰」を連想させる様な段階的に恥辱を強めてゆく罰のモードや、子どもの被暗示性の利用、或いは他人への献身は集団的背景がなければ無意味であるとするなど、彼の道徳科学のうちには、何がしかの「道徳の古層」を覗かせている箇所がある。デュルケムはソルボンヌ期に同時に宗教研究を進めており、豪州のトーテム儀礼における聖への没入が、集まる人々の密度に比例して、異常な精神の昂揚を示していることに着目した。この「集合的沸騰」はパトスの道徳的結合であり、道徳科学のようなロゴスによる反省的な認知ではない。デュルケムは統合を最高善と見做していた故、そのパトスの結合性に魅せられたのであろう。しかし、啓蒙期の道学者としてロゴス的な徳目への追従も訴えなければならなかった。些かの葛藤もあったのだろうか、結局、「原初形態」では歴史的進歩の考えを緩め、未開人の思考も、科学と同様、分類と体系的整合性という点において大差はないとし、所謂「融即」心性も否定し、人類は常に、その時代の「選好的な」概念思考を行っていたのだ、という共時態の見方に行きつく。知性による自律的連帯を重んじたデュルケムもロゴスの道徳（アノミツクな行為を嫌う）よりもパトスの道徳（中庸を外れる？）に呑み込まれた感がある。無論どちらも集合表象への積極的帰依という点では同じものである。しかしデュルケム自身、この外在化した集合表象という考えにより拘束され、啓蒙的な当人も、道徳の古層へと連れもどされてしまったという感は拭えないのだ。

＜集合表象とその深度＞

集合表象への帰依が道徳である。では集合表象とは何なのか、本来は「分業社会にあって相互了解を可能にする準拠」程度の概念だったのであろうが、その「拘束性」の覆在的性格により深度を増し、「規準」では「慣習無視と嘲笑」といった日常性の内に観察される。「拘束は容易にみとめがたいものもある」。「第2版序文」では「社会生活はそのすべてが（集合）表象から成り立っている」とまで徹底される。同時期、この概念がリアルであることを証明するために、この問題に絞込んだ論考、「個人表象と集合表象」をものにしている。ここでは間接還元法により、深度を深めた集合表象の存在証明が行なわれる。即ち個人と個人表象の関係から、社会と集合表象の存在が証明されるのだ。往時の連合心理学における記憶成立説明をまず批判する。類似したイメージの相互作用により、差異が平均化した記憶表象が生まれ、これはもとの知覚とは異なる意識レベルのものであるが、「意識の付加」ではない。意識は反射知覚が統合されて生じた上位の秩序なのである。要素結合と意識の「構成」（ヴントの創造的統合？）にこだわるデュルケムは「スイ・ゲネリス」なカント主義者なのか。「原初形態」においてカントの認識論をカテゴリーの先験性において批判しているが、カテゴリー自体の価値は認め、それらは歴史、地域により「選好的」であるとする。未開人も儀礼を中心とした、リズム的時空軸や因果律によってそれなりの統覚作用はもつ。ただ、個人知覚は社会的カテゴリーの推敲を経ないと認識は不可能というわけである。個人表象が統覚作用によって、経験的ヒュレーとは異なるものを産出していたとすれば、集合表象も、個人の総和以上のものを発出する筈だというわけである。個人の融合の仕方は「多様な個性が相殺し中和し」そこでは人間性の「極度の一般化」がはかられ、もはや個人に還元しえない、と。集合表象は個人表象間の「事実を食み出す」のだ。有機的社会に至って地表における人口密度や交通網といった空間形態は推移したものの、依然、社会は結合した個人を基体とするゆえ、新たな相互作用の反復から別の集合表象が発出する、というのが彼の論明なのである。ところで集合表象はどちらかというと慣習的な思维形式として、そのノエシ的契機が重視されていたが、この論文では個人表象とパラレルに眺めることにより、本来の意味での「表象」作用—ノエマ的契機も考慮されることになるわけだ。そしてこのノエマ的契機を認めることにより、イメージのレベルにおける集合表象の作像機能を問題とす

ることも可能となるのではないか（デュルケムは一応、知覚とイメージは個人的起源と見なしているが）。集合表象がノエマの契機を得ることによって、外化された対象としてその深度はますます深まったのではないのか。このような深度の問題は、ギルヴィッチの深層社会学的な集合表象論で取り上げられたものでもある。彼は集合表象を、①形態学的基础②制度③象徴④集合的価値⑤集合表象の働きそれ自体、とし順番に深度は深まるという。とすれば科学的な道德論として「自由検討」が可能となるのは②レベルあたりまでではないのか。③以下は集合表象の圧倒する覆在力を予想させるものである。こういった「力」は、ロマン期の民俗学（サンチーブ、コスカン、フレーザーら）とどこかで共通する考えのようだ。

<集合表象と心性>

民俗学と歴史社会学の境界は曖昧であるが、アナル派の語る民俗的「心性」は集合表象と関連がありそうである。宮島喬は「フランス社会学派と集合意識論」の中でアナルの「心性」は、やはりデュルケム派の継承と見做している。「深層の歴史」や「日常性」への関心は、基礎的な「心性」を前景化することにつながる。（これは柳田国男のいう「心意」とも重なるのであろう。）いずれにせよ、啓蒙理性とは別の系として埋もれていた心性、この見えざる規定力に対し我々はどうのように道德的価値を自由検討してゆけばよいのか、ポスト・モダン思想の先駆であるハイデガーの「存在と時間」にも心性分析のような方法がみられ、それもグリム語源学を援用するといったものである。集合表象の深さを問題とすることは単に近代の道德批判にとどまらず、心の「深さ」に基づく新しい道德の予示であるのかも知れない。少なくともベルグソンにおいてはそうなのである。

<想話機能－「物語」としての道德>

集合表象の深度を直ちに測った一人が、デュルケムの盟友、ベルグソンであった。彼は道德の起源の考察（「道德と宗教の二源泉」）において、集合表象の深度をその巧妙な作用性において考察する。子ども時代に「禁止」の言葉に触れた子どもは集合表象の威力を感得する。「両親と先生は委任され作動しているように見えていた。我々はこのことを明瞭に理解していたわけではなかったが」。子どもはマナの力を自身のマナの心性より感得し、やがてその力は忘れられてゆく。集合表象の拘束は又、社会化過程としても表現されるが、これは受諾の意志すら不必要な「自動化過程」であり、これに従うことは「快樂」でさえあるとベルグソンは語る、（cf. 「規準」第一章）「克己」といった徳目も、「感情の強度」において注目されるものの、それ自体は集合表象の志向にかなうものであり、苦痛ではないのだ。「全体的責務」としての習慣形成は全て「うっちゃりっぱなし」（レッセ・アレ）である、とまできわめ

て皮肉に、言い切るベルグソン。彼にとってデュルケムが目的とする社会の統合など、レッセ・アレにあっても自然に進行する「力」なのである。むしろコムニタスはその自己保存欲において食欲であり、常に他のコムニタスを排斥した上で成立する体のものなのだ。集団エゴは、国家ナルシズムにまで拡張し、それは決して「人類愛」という階位にまで高まらないとみる。結局、デュルケムが美德とした集団への献身も、ベルグソンにあっては集合表象に個人が食われてしまったに過ぎない事とされる。更にベルグソンは、集合表象はその社会エゴイズムを合理化するために、あまたの道德を語りうる、とみてゆくことになる。これが有名な「想話機能」（ファビュラシオン）である。人類は昆虫社会のように行動を集合表象に全面的にセッティングされておらず、知性は、少しの自由度を持つ。この知性を「取り込むために」、集合表象は様々な「物語」を語るのである、と。この想話は概して道德や宗教や美談といった社会の自己保存にかなうモチーフを特色とする。たとえば宗教の語る代表的な想話には「死後の生存」があるが、これは、死を恐れる知性が「意気消沈」し社会の紐帯を緩めることに對抗して、集合表象が個人の不安を打ち消すために産出した「物語」なのだ。つまり知性に対して集合表象は知性的に織られた「物語」で取り込んでしまうのである。ベルグソンのこの想話機能という考えは、道德の現状批判を行なう時、現在でも有効であると思われる。（例えば「核兵器は銃よりも悪い」という想話…通常兵器による殺し合いの暗黙の肯定、あるいは「自然を守る」という想話等）しかしベルグソンは、集団ナルシズムを自覚させない道德のしくみへの非難だけを目的としたわけではなく、むしろこれらを克服するような一つの理想社会（「開いた社会」）を構想しているがゆえに、集合表象の根深さを呈示したのだ。そして、ベルグソンの考える「開いた道德」は20世紀の巨人、G. ペイトソンの考える新しいモラルにおいて似た方向で深められてゆくことになる。要は集合表象の超越の問題なのであるが。

（以下、発表時に発表します）